

宮城県日中友好協会

TEL・FAX 022-274-3811

Eメール jcfa-miyagi@rose.plala.or.jp

ホームページ <https://miyagi-jcfa.com/>



＜お知らせ＞「日本と中国」(号外・宮城版)への各地区・委員会からの行事予定及び実施後の記事・写真への投稿をお待ちしております。なお会員個人からの投稿(掲載の判断は一任)も掲載していく事になりました。いずれも上記のメールかFAXにお願いいたします。

女性委員会で「日中親善料理教室」開く

毎年恒例の「日中親善友好料理教室」が11月9日、青葉区中央市民センターで開催されました。水戸委員長のあいさつの後、料理開始。飲茶は柳沢千暁さんの指導の下、もち米だんご2種類と餃子2種類、日本食は瀬戸副委員長のもと、舞茸ご飯とさつまいもご飯を作りました。

料理ができあがったところで、講師の程艶春さんに中国茶のセットの説明や入れ方を実演していただき、優雅に美しく入れる、素敵なお作法を学びました。また日本のお抹茶のお点前では、初めに金井相談役から“茶の湯”の歴史などの話があり、続いて横山絹代さんより、お道具やお点前の説明をしていただき、皆で一服いただきました。中国と日本の茶道・素晴らしい文化の交流となりました。(副委員長・石橋孝子)



10.19「魯迅之碑」献花式での感想＜留学生・浙江越秀外国语学院から尚絅学院大学に留学＞

＜浦修遠君＞中国近代文学の父であり、民族の魂を象徴する魯迅の像の前で、静かに頭を下げた瞬間、歴史の重みと文学の力を感じました。彼の鋭い言葉は、私たちに勇気と理性を与えてくれます。献花はただの儀式ではなく、彼の精神を再び胸に刻む大切な機会でした。＜張晨夕さん＞静かな会場には花が飾られ、多くの人が魯迅先生を偲んでいました。私は紹興で学んでおり、仙台で先生を追悼できたことに深い感慨を覚えました。先生の歩んだ道を思うと、時代を超えてなお響く精神の力を感じ、心が引き締められました。＜白格毓君＞献花式に参加して、心に温かな感動を覚えました。静かな雰囲気の中、人々が敬意を持って献花する姿を見ると、魯迅先生の文学や思想が永く人々に影響を与えていることを実感しました。先生の作品が現代においても重要な意味を持っていることが分かり、学生時代に学んだ内容がより深く理解できるようになりました。今回のイベントを通じて、先生の精神の永続性を再認識し、今後も様々な視点から、学び続けたいと思います。

☆四川省樂山市の友を歓迎☆

11月3日、大衡村に郭沫若(初代中日友好協会会長、文学者、副総理)の出身地・樂山市沙湾区から周強・区委常委、羅莎・党組書記、楊定江・党組書記の3名が訪問し、役場庁舎では小川ひろみ村長、鹿野浩副村長等が出迎えた。



これには隣接の富谷市日中から横山弥生理事長、水戸憲子副会長等が同席しました。一行は郭沫若氏の妻・佐藤をとみさんの生家や「昭和万葉の森」にある顕彰碑を見学しました。(「日本と中国」12月号を参照)

登山家だった親父が残した世界地図。タクラマカン砂漠の西端、和田（ホータン）・莎車・喀什（カシュガル）の三都市に丸印がついていた。八十年代後半中国の個人旅行ができるようになった頃、若者は皆新疆ウイグル自治区を目指して鑑真号を降りた上海駅から隴海線の快速列車に乗り込んだものだ。僕はそういった風潮を無視して再々漢民族の揺籃といえる河南省を中心に歩いてきたのであったが、親父の地図を見てあのころ見過ごしてきた新疆に行ってみる気になった。そう思い立って九月一日から十五日までの半月をかけて和田から砂漠をぐるっと半周して烏魯木齊まで旅することにした。

仙台から大連経由で北京に到着。中国国航が用意したホテルで休息後、翌朝4時に再度北京首都空港から和田まで五〇〇〇kmを一気に飛ぶ。途中ゴビ砂漠や万年雪を頂く天山山脈を越えてタクラマカン砂漠を横断して和田空港に着陸した。

砂漠の星空と遠くの崑崙山脈を撮影しようと意気込んできたが、この地は砂漠の南に位置し北からの風に吹き付けられる砂塵で視界はよくない。星空も山も早くにあきらめた。飛行機に乗って気づいたのだが明らかに漢民族の顔が少なく、ウイグル族あるいは別の少数民族とわかる人たちがたくさんいる。砂にまみれた街を行く人も然りである。当初強く持っていた意気込みを挫かれると、さて何を見に来たのかが皆目わからなくなりまあ適当に見て歩かないかなという気になる。この感覚は最初に訪中した頃のものに似ている。結局全オアシス都市の博物館を見て回るようになった。ここでは和田の博物館で見たものを記す。

実は新疆の全博物館共通の展示物は和田のニヤ遺跡で発掘された「五星東方に出ず、中国に利あり」という文字が織られた錦の肘当て(写真①②)。後漢頃のものらしいが日中合同の発掘調査隊が一九八五年に発見し今年が発見30周年ということで、どこでも大規模に取り上げられている展示なのだ。ポイントは後漢時代からこの場所は「中国」という認識であったということで、各民族が統一したナショナリティを覚醒することに寄与する遺物となっていることだろう。多種多様の民族が暮らすこの地には必要だと思われたのであろう。



さて最後に砂漠の墓地から発掘された遺体の展示(写真③)がある。烏魯木齊の新疆ウイグル自治区博物館では撮影禁止であったが、和田の博物館では可能であった夫婦の遺骸を撮影して載せておく。



手をつないだ二人の遺体はガラスケースに入って展示されているが、天井から吊された多くの花束の間から射し込む柔らかな光が二人を包む。一目見てこの学芸員の優秀さがわかった。

何よりも二人への尊厳と敬愛の気持ちがあふれる展示に感動を禁じ得なかった。